相互性としてのケア

——養育・看護・社会福祉の観点から——

○西山直子¹・鮫島輝美²(非会員)・竹内みちる³(非会員)

(¹京都大学大学院教育学研究科、²京都大学大学院人間・環境学研究科、³原子力安全システム研究所)

キーワード: 相互性、ケア、負担感

'Care' as a mutual support among human relationships: from the viewpoint of nurture, nursing and welfare

Naoko NISHIYAMA¹, Terumi SAMESHIMA^{2,#} and Michiru TAKEUCHI^{3,#}

(¹Graduate School of Education, Kyoto Univ., ² Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto Univ.

³ Institute of Nuclear Safety System, Incorporated)

Key words: mutuality, care, burden

目 的

親が子どもを育てるということ、老親を看取るということ、地域社会で高齢者の介護をするということ、病める者を世話するという、といった養育や介護・看護の現場においては、「ケアするもの」と「ケアされるもの」の二者が存在する。とすると、そうしたケアの営みは両者を上下関係のなかに落とし込み、ケアを負担感の伴うものとして認識しがちである。しかし、Erikson(1964)の相互性(mutuality)概念にしたがえば、ケアの営みは「ケアをする人／される人」といった単純な二項対立にわけられるものではなく、「ケアすると同時にケアされる」というように、かかわりのなかで双方が互いに癒し癒され高めあうものとしてとらえることができる。

本発表では、この相互性概念を理論的視座として、生涯発達心理学(西山)、基礎看護学(鮫島)、社会心理学(竹内)の背景をもつ三者がそれぞれのフィールドで得られた知見を持ち寄り、相互性としてのケアの営みに関して議論してきたことを紹介したい。そして、その議論のなかで浮かび上がった相互性概念の不備不足を指摘し、新たな視点を付与して、概念理解の幅を広げることを目的とする。

※なお、本共同研究は平成 20-21 年度の京都大学グローバル COE「心が活きる教育のための国際的拠点」の助成を受け、研究開発コアキアムの活動の中で行われたものである。

方 法

研究 1 養育・介護における相互性(西山)

調査実施時期: 2008 年 6-9 月

調査協力者: 大学生の娘を持つ中年期母世代 71 名

調査方法: 三世代の家族関係を描いた描画による質問紙調査

調査内容: 「祖母—母—娘」三代の関係性をイメージした絵を描く調査で得られたデータより、特に養育や介護をテーマとしたものを抽出して質的に分析。相互性概念に照らして、母系女性三代の世代間関係におけるケアの営みを考察。

研究 2 介護・看護における相互性(鮫島・竹内)

調査実施時期: 2008 年 9 月～現在も継続中

調査協力者: 「認知症居宅介護研究所」および同代表の T 氏
※同研究所は、代表の T 氏が自分の妻を自宅にて 20 年間介護してきた体験をもとに、「認知症を正しく理解し、認知症の人の心に寄り添う介護」を伝承・開発することを目的として 2008 年に設立された NPO 法人である。

調査方法: 当事者と研究者の共同的実践によるアクションリサーチ(矢守, 2008. pp.164-167)に基づくフィールド調査

調査内容: 認知症の家族・看護師・ヘルパー・ケアマネージャーなどが参加して月に一回開催される研究会に赴き、意見交換・聞き取り調査および T 氏に対するインタビューを実施。

結 果

研究 1 養育・介護における相互性(西山)

青年期娘世代・老年期祖母世代の中間に位置し、両世代から世話や支援を求められる立場にある中年期母世代の描画には、やはり、ケアという主題が色濃く現れていた。それは、現在の時点で自分が両世代に対して施すケアだけでなく、娘世代が幼いころに子育てのサポートを祖母世代から受けた経験や、未来において娘世代の手を借りながら祖母世代を世話する姿など、「ケアしケアされる」営みが三世代の家族関係のなかで立場をかえながら繰り返される模様を描いていた。

研究 2 介護・看護における相互性(鮫島・竹内)

T 氏に対するインタビューの中で、「認知症の居宅老々介護は失敗、失敗、ピンチ、ピンチの連続にもかかわらず、天使のようなヘルパーさんに恵まれた。」「ピンチはチャンスや。」「この人(認知症である妻)がおらんとあかんのです。」という言葉を得る。また、フィールド調査で出会った介護者たちの多くが、介護を「負担」だけで語るのはではなく、自らの「成長・学びの場」として積極的に引き受ける姿勢を見せていた。

考 察

研究 1 より、三世代という家族関係のなかで、「ケアしケアされる」営みが娘／母／祖母と立場を変えながら順繰りに行われる様子が示された。その相互的なケアの営みは、ある一時期を取り上げただけでは見えてこない。過去から現在を通し未来まで展望するという長い時間軸のなかでとらえたときにはじめて、育てられる者が育てる者となり、看取る者が看取られる者になる、養育と介護の相互性が浮かび上がる。

また、研究 2 より、在宅介護の現場において、家族よりも大きなつながりである地域社会のなかで、ヘルパーや看護師などケアに携わる人々が共同して認知症の患者やその家族を支援する様子が示された。それは、相互的なケアの営みの空間的な広がりの意味する。ケアするものがケアされるものを必要とし、介護を「負担」としてではなく共に楽しく過ごすための工夫の余地のある行為として受けとめる姿勢は、この空間的な視点の広がりのおかげでこそ生まれたものと言えよう。

これらの研究により、同時的で関係限定的な元来の相互性概念の理解の幅を超えて、時間的・空間的に広がりをもったものとして相互性をとらえうる可能性が示された。

引用文献

Erikson, E.H. (1964). *Insight and Responsibility*. New York:

W.W.Norton & Company. [エリクソン. (1971). 洞察と責任.

鐘幹八郎[訳]. 東京: 誠信書房.]

矢守克也. (2008). アクションリサーチ. [子安増生・二宮克美[編]. 心理学フロンティア. 東京: 新曜社. pp.164-167.]